

第2章 保全活動計画について

1 基本的な考え方

秦野市は、丹沢連峰と渋沢丘陵に囲まれた盆地で、山岳地帯から丘陵、豊富な地下水や湧水とそれに起因する湿地帯など、多様な自然環境に恵まれています。特に山麓部から盆地内に広がる里地里山は、秦野の自然環境の特性であり、秦野特有の生物多様性を育んできました。

これらの里地里山は、葉たばこ栽培等と関連して生活の中で重要な位置を占め、特に意識することなく良好な環境が創出され、維持されてきました。地域住民の生活と密接に関連して生物多様性が保全され、住民はその恵みを楽しんできました。

しかしながら、葉たばこ栽培の衰退とともに、人々の生活の中から里地里山が遠ざかってしまいました。

このようなことから、里地里山保全再生モデル事業が実施され地域戦略が策定されました。地域戦略では、「里地里山の保全再生による地域社会の発展」を目標とし、農業者の意欲と住民や都市住民の熱意・力を借りて葉たばこ栽培が盛んだった昭和30年代半ば頃の里地里山の風景を保全・再生することにより（図2-1）、

- 生物多様性の保全

- 水源、地下水の保全

- 活力ある生産・生活の場の創出（荒廃農地・山林の解消、鳥獣被害削減等）の実現を目指しました。

この地域戦略に基づき、行政も支援しつつ里地里山保全再生団体などによって里地里山は保全・活用されてきましたが、①高齢化、②活動者の限定、③やりがいの喪失などの課題も生じ、ボランティア活動には、限界も感じられるようになってきました。

秦野市地域連携保全活動計画では、地域戦略の目標に関する考え方を基本に、地域戦略策定後に生じてきた課題等を踏まえ、里地里山の保全・再生・活用に向けた基本的な考え方を以下のとおりとします。

【基本的な考え方】

里地里山を活用した地域づくり ～里地里山を積極的に取り入れた ライフスタイル、地域社会の確立～

地域連携計画では、従来のボランティア活動等において生じてきた課題を克服していくために、様々な生活の段階で、里地里山を積極的に活用していくような生活様式を考え、実践していくとともに、里地里山を取り入れたライフスタイルが秦野の魅力であり、秦野の「売り」として誇れるような価値観を創造していきます。



図 2-1 昭和 30 年代頃の里地里山の風景

2 計画の位置づけ

本計画は、生物多様性地域連携促進法（平成 22 年 12 月 10 日法律第 72 号）に基づく法定計画となります。

また、里地里山保全再生モデル事業地域戦略を上位とし、その行動計画として位置付けます（図 2-2）。

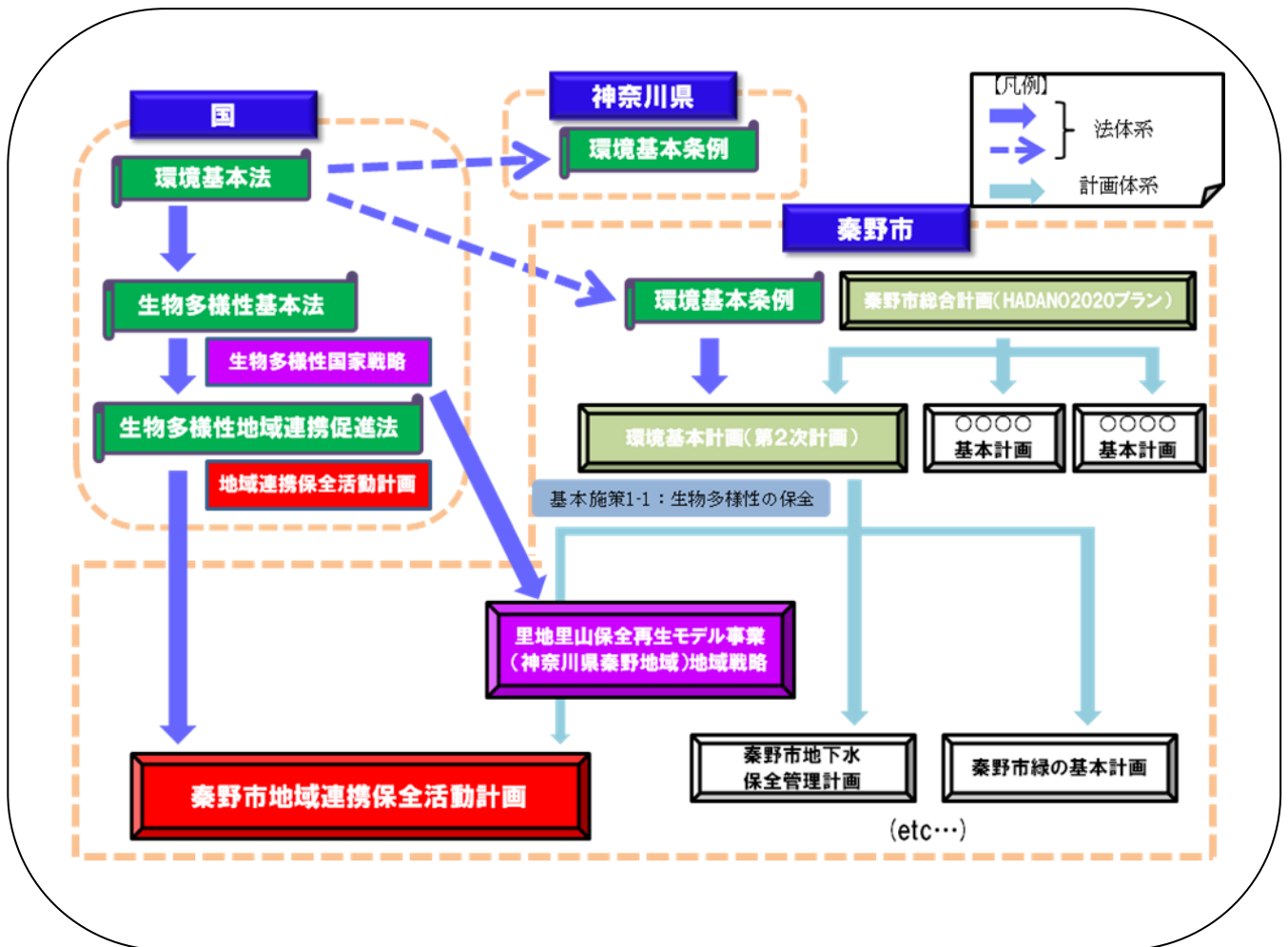


図 2-2 計画の位置づけ

3 計画区域

計画区域は、秦野市全域とします。

さらに、里地里山保全再生モデル事業地域戦略と同様、上、渋沢丘陵、北・西、東・大根の4地区において、地域の実情に即した計画を具体的に検討・実現していきます（図2-3）。それぞれの現状は次のとおりです。

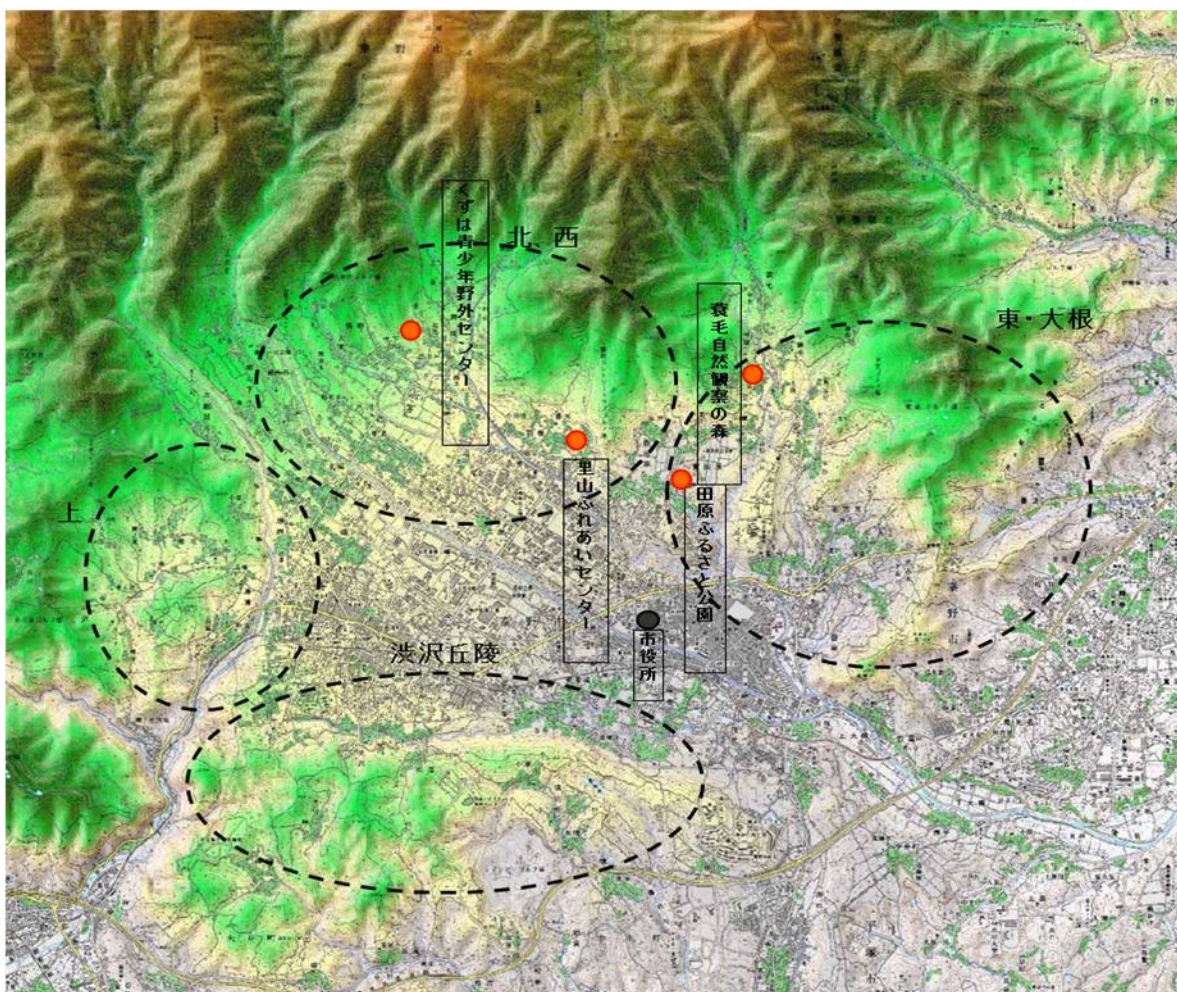


図2-3 計画地区の位置

上地区の現状

- ・周囲を山に囲まれた農業地域で、里地里山の原風景が比較的良好に残されています。
- ・四十八瀬川流域では、良好な水辺環境の指標となるホトケドジョウ、サワガニなどが生息しています。また、柳川周辺では、イモリ、ホトケドジョウ、サワガニ、ホタルが観察される他、トンボ類もよく見られます。
- ・水田湿地の「柳川生き物の里」を中心に地域住民が保全活動を実施しています。
- ・市内では最も人口が少ない地区であり、高齢化が進行しています。地域の活性化、パワーの確保が課題。鳥獣による農作物の被害対策も課題となっています。

渋沢丘陵地区の現状

- ・丘陵地帯に、クヌギ・コナラの雑木林や竹林が広がっています。
- ・室川流域では、良好な水辺環境の指標となるホトケドジョウ、サワガニなどが生息しています。また、谷戸の周辺では、シュレーゲルアオガエル、ホタルが観察され、トンボ類もよく見られます。地区内では、ノスリなどの猛禽類も観察されています。
- ・様々なボランティア団体が里山保全活動を実施しています。今後も、活動の活発化が期待されますが、土地所有者等との調整が課題です。

北・西地区の現状

- ・北部には丹沢の山々に続く緑濃い雑木林、スギ・ヒノキの人工林が広がっています。農家人口も多く、平野部には畑が広がっています。
- ・葛葉川流域には、アブラハヤ、フナなどが生息しており、上流ではホタルが観察されています。地区内では、サシバ、ノスリなどの猛禽類も観察されています。
- ・自然学習環境教育の拠点（里山ふれあいセンター、表丹沢野外活動センター）が整備されています。
- ・ヤマビル対策、鳥獣による農作物の被害対策が課題となっています。

東・大根地区の現状

- ・北西部には丹沢の山々に続く緑濃い雑木林、スギ・ヒノキの人工林が広がっています。農家人口も多く、平野部には農地が広がっています。他の地区と比較すると、水田が多い点に特徴があります。
- ・金目川流域には、アブラハヤ、フナなどが生息し、上流ではホタルが観察されています。また、水田地帯では、シギ・チドリ類、サギ類などが餌を探している姿が見られます。地区内では、サシバ、ノスリなどの猛禽類も観察されています。
- ・ボランティアによる里山保全整備活動が一部で行われています。
- ・荒廃農地対策、鳥獣による農作物の被害対策が課題となっています。

4 活動目標

「里地里山を活用した地域づくり～里地里山を積極的に取り入れたライフスタイル、地域社会の確立」とした目標を実現していくために、以下の4つの活動目標を設定します。

1 里地里山を使う

里地里山での保全活動から一歩前進し、積極的に活用しつつ保全を図っていきます。ボランティア活動としてだけでなく、様々な生活の場面で里地里山を無理なく使い、地域資源として認識していくことにより、保全にも役立てていきます。

2 里地里山を誇る

里地里山ライフが秦野の魅力として誇れるような環境、価値観を創造するとともに、居心地の良さを感じられる場所を創出していきます。生活の中に里地里山を取り込み、種々の恵みを享受するとともに、実感した心地よさを外部へも発信していきます。

3 里地里山で学び・楽しむ

里地里山の利活用を通じて、誰もが学び、楽しみ、やりがいを感じられる活動を展開します。教育、学習の様々な場面だけでなく、生活の中で里地里山を使っていくことにより、里地里山の機能、楽しさ、活動の充足感などを自分のものにしていきます。

4 みんなで里地里山

様々な年齢層のライフスタイルに合わせ、それぞれのライフステージに合った里地里山での活動に楽しんで参加したくなるような場を設定し、雰囲気づくりを行っていきます。行政や地域住民、活動団体だけでなく、都市住民や企業、研究機関等が楽しみながら活動し、居心地の良い地域を創生していきます。

5 計画期間

具体的な計画の期間は10年間（平成26年～35年）とし、5年で見直すこととします（図2-4）。

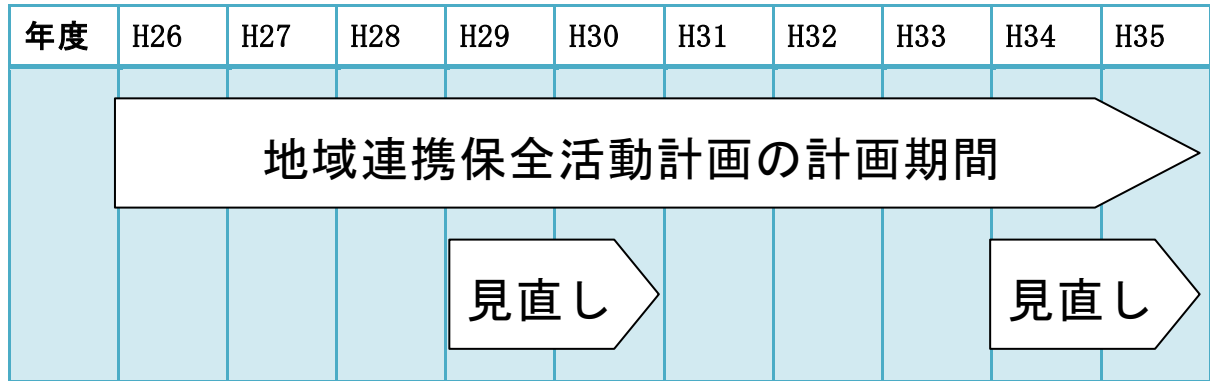


図2-4 計画期間

6 国・県との連携

一体的に実施されることが望ましい事業については、国・県との連携を図ります。

神奈川県との連携については、水源林保全のための「水源環境保全・再生市町村交付金」の活用や、「神奈川県里地里山の保全、再生及び活用の促進に関する条例」に基づく、里地里山保全等地域の選定、保全、活用等について引き続き連携を図っていきます。

7 推進体制

里地里山の保全・再生、活用に関しては、これまでボランティアの活動団体を主体に実施してきました。平成25年11月現在、43の団体が市内で活動しています。これらの団体においては、里地里山保全再生モデル事業で策定された地域戦略で位置づけられた4地区の事業等も踏まえ、間伐、下草刈り等の林内整備や里山のハイキング、荒廃農地の活用等、様々な活動を行っています。また、これらの活動団体により「はだの里山保全再生活動団体連絡協議会」（活動団体の活動方針の検討や意見交換の場）を設立し、相互の情報交換やイベントの開催、活動の連携等を行っています。一方で、「1 基本的考え方」（P22参照）で記載したように、団体が活動していく中で様々な課題も生じてきており、より多くの主体が参加した「里地里山を活用した地域づくり」が必要とされています。

このため、本計画の推進に当たっては、里地里山保全再生モデル事業において設定された4地区のそれぞれにおいて、本計画を具体化していくために、関係する様々な主体が協議を行っていく場を設定し、話し合いを進めるとともに、この協議の場を主体として、地域の特性を活かしたイベント等の活動を実施していきます。また、適宜アンケートなどにより里地里山の現状や地域のニーズを把握し、事業に反映していきます。

計画に基づき実施される個々の事業等については、多様な主体が連携した横断的な取組となるよう、里地里山保全再生モデル事業を契機に設立され、秦野市全体の里地里山の保全・再生の取組について国・県・市・自治会・農林業関係者・活動団体等で協議を行っている「里地里山保全再生推進会議」において年1回、事業の点検を行います（図2-5）。

さらに、5年ごとに、その時々々の里地里山及び活動の状況と課題等を踏まえ、計画に掲げられた活動の進捗状況を評価しつつ、評価結果と社会情勢の変化に応じて計画を見直します。

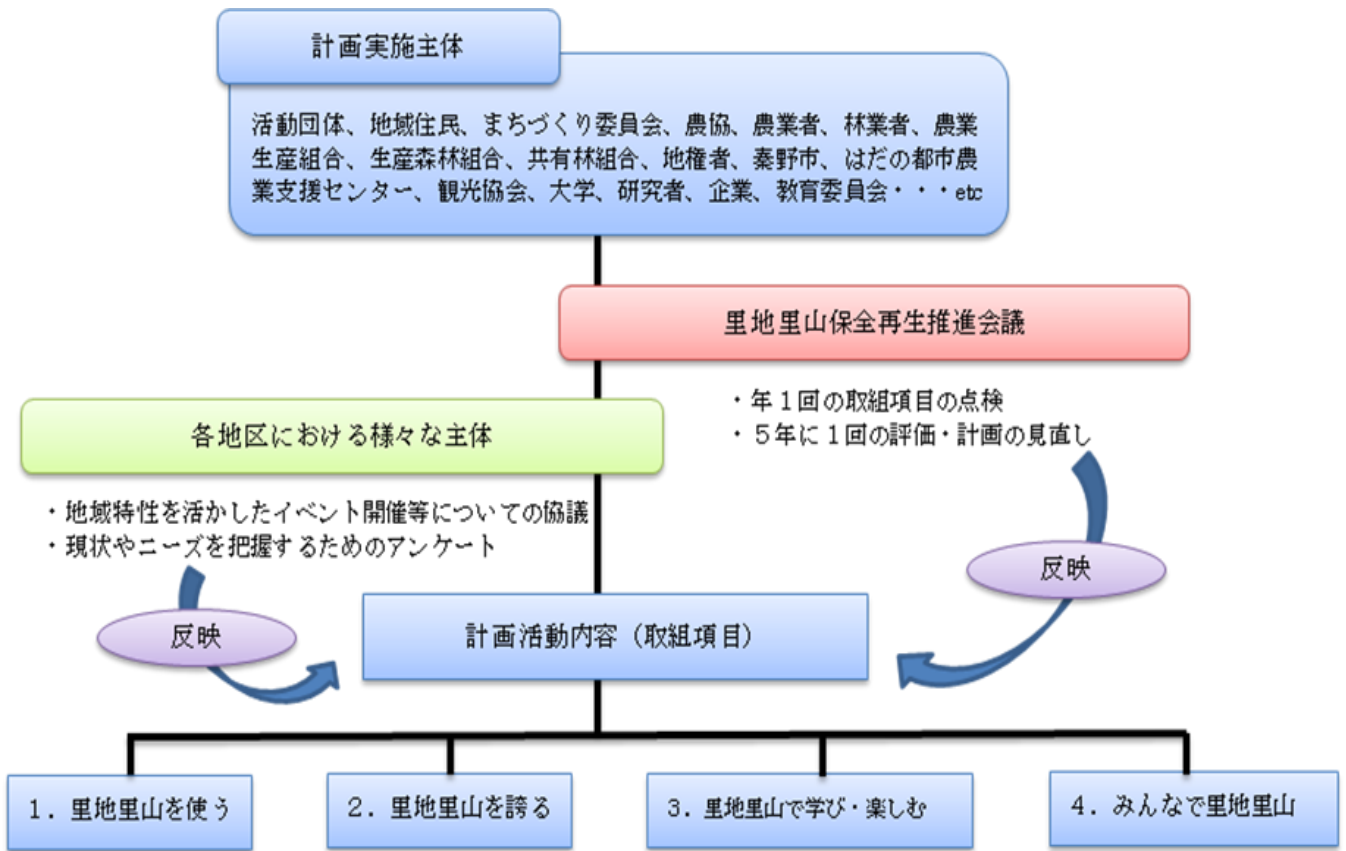


図2-5 推進体制イメージ図